

# 『狭衣物語』と禊子内親王

小栗伸子

また、この物語は、「さらでもありぬべき」<sup>註2</sup>神秘的な事件がいくつも発生することで知られている。

何故『狭衣物語』は、このような形をとったのであろうか。作者が語ろうとしたものは何だったのか。物語に登場する女君に注目しながら『狭衣物語』について考えたい。

## 二

『狭衣物語』は、『源氏物語』の絶大な影響を受けた作品である。それはもはや、模倣などという言葉の上の問題ではない。『狭衣物語』の構成において、発想において、感性において、『源氏物語』は、脈々と息づいているのである。

さらに、『狭衣物語』は、数多くの優れた和歌を持つ物語である。『明日記』に「歌に於いては拔群」<sup>註1</sup>とあることから、その水準を察することができる。加えて、歌語や引き歌の駆使された情緒豊かな文章は、『無名草子』に「言葉遣ひ何となくえんに、いみじく上ずめかしく」と評されている。

『狭衣物語』の作者、六条齋院宣旨は、禊子内親王の乳母であった人物である。

後朱雀天皇の第四皇女として長暦三年（一〇三九）に誕生された禊子内親王は、生後九日にして生母嬪子女王（敦康親王女）を、そしてその七年後には、父帝を失ってしまふ。その後、皇女は、八歳で賀茂齋院に卜定され、十歳で

紫野の本院に入り、病のために退下するまでの十年間を齋院として過ごされ、以後六条院にて病臥の日々を送られてゐる。

この間、内親王の傍に付き従い、見守り続けた乳母によつて「狭衣物語」は執筆されたのである。

齋院という特殊な世界に身を置かなければならなかつた病弱な皇女は、和歌に心を寄せられたようである。「栄花物語」にも、

稚くおはしませど、歌をめてたく詠ませ給。候ふ人(注)も、題を出し歌合をし、朝夕に心をやりて過させ給。

〔栄花物語〕けぶりの後

という文章が見えるが、禊子内親王が主催された歌合は、実に二五回を数える。後宮(注)に関して行なわれた歌合では、群を抜いていると言えよう。中でも、特筆すべきは、天喜三年（一〇五五）五月三日に行なわれた物語歌合である。これは、

物語合として、今新しく作りて、左右方わきて、廿人合などせさせ給て、いとをかしかりけり。

〔栄花物語〕けぶりの後

とあるように、女房たちに新しく物語を作らせて、その作中歌を歌合の形式で競わせたものである。天下の耳目を集

めたに違いない、この華やかな歌合は、禊子の保護者であり、当時の宮中の最大権力者であつた関白藤原頼通によつて演出されたと考えられる。

五月五日六条前齋院にものがたりあはせしはべりけるに、小弁おそくだすとてかたの人人こめてつぎのものがたりをいだしはべりければ、うちの前太政大臣かの弁がものがたりはみどころなどやあらむとてことものがたりをとどめてまちはべりければ、いはかきぬまといふものがたりをいだすとてよみ待りける。

〔後拾遺和歌集〕第一五雜一・八七四歌の詞書(注)

以上の文章からも、頼通が、物語合(注)に参加する女房について、その創作力を承知していたことがうかがえる。天下人である頼通がこの歌合の歌人（物語作者）を事前に知っていたとするのならば、物語歌合の規模の大きさを察することができよう。

しかし、この歌合を贈られた禊子内親王の側には、浮き立つような華やかさや、趨勢を誇示するきらびやかさはない。

明暮御心地を悩ませて給て、果は御心もたがはせ給て、いと恐ろしき事をおほし歎かせ給。

〔栄花物語〕けぶりの後

從爾以來被責狂病、不知前後經數十年(注)。

〔中右記〕

これらの記述からもわかるように、内親王の生涯は、病気との闘いであった。この上ない高貴な身分に生を受けながら、幼くして両親を失い、齋院という特殊な世界に生きなければならなかった病気がちな皇女が、和歌や物語に心を惹かれたのは、当然であったかもしれない。和歌や物語を愛するより他に、その現実感を伴わない人生にどのような救いがあっただろうか。

だからこそ、頼通をはじめ、内親王を支えた人々は、内容、規模ともに他の追隨を許さぬほどの歌合を開催しようとしたのではないか。実際にはそのように生ざられない謀子のために、物語歌合という豪華な絵巻物を広げてみせたのではないだろうか。

このように考えていくと、二五回もの歌合や、他に類を見ない物語歌合が行なわれた理由の一つが見えてくるように思う。そして、それこそが、六条齋院宣旨に『狭衣物語』を書かせた動機でもあるのではないか。

### 三

ここで『狭衣物語』が執筆された時期を振り返ってみたい。『狭衣物語』は、巻一で、今上天皇の妃を「皇太后宮」

と称しており、史実に突き合わせて、後冷泉天皇の中宮皇子が皇太后宮に、皇后寛子が中宮に、さらに女御歆子が新たに皇后となられた、治暦四年（一〇六八）以降に成立したと考えられている。或いは、

先帝の中宮をば皇后宮、殿、皇后宮は皇太后宮、皇太后宮をば太皇太后宮。 （采花物語）布引の滝

という、いわゆる四后並立を見た、承保元年（一〇七四）以降であったのかもしれない。

このころ、『狭衣物語』の作者、六条齋院宣旨の身边には、何が起っていたのだろうか。

謀子内親王が病のために康平元年（一〇五八）に齋院を退下されると、それまでに頻繁に行なわれていた歌合は、同七年まで開催されなくなってしまう。治暦四年の頃は小康を得られたのか、何度か歌合が行なわれたが、延久二年（一〇七〇）に第三回の歌合が開かれた後、永暦二年（一〇七八）までそのような動きは見られない。内親王の病状は、少しずつ悪化していったと思われる。

加えて、この間に謀子内親王の最大の保護者藤原頼通と、庇護者として大きな存在であった、家司源師房が続いて薨じていることも歌合空白期間の原因であろう。

二人の死は、内親王にとって、大打撃だったに違いない。頼通は、単なる謀子の親代わりではない。ありとあらゆる

面で、基盤となつて彼女を守り続けた人物であつた。そして師房は、細やかな配慮で、内親王の生き方を守つていたのである。和歌や、物語を愛した病弱な皇女は、その世界を支えてきた二つの大きな柱を失つたのである。

宣旨が「狭衣物語」の執筆を決意したのは恐らくそのころであろう。師房が没した翌年に開かれた歌合を最後に、禊子内親王家歌合に禊子の名前を見ることはない。

依爲出家人無薨奏歟（注）（中右記）

という記述からも、内親王が出家されたことをうかがい知ることが出来るが、「狭衣物語」が作られたのは、内親王が出家される以前だと考えたい。あまりにも大きな不幸に打ちのめされ、悲嘆に暮れる禊子の姿を、宣旨は、見過ごすことができなかったに違いない。失意の内親王の心を癒すこと、何よりもそのことを乳母は考えたであろうから。こうして、「狭衣物語」は作られるべくして創作されたのではないだろうか。病気に苦しみ、保護者を失つた悲しみに沈む内親王のために。悲運の皇女を慰めるために。

#### 四

六条齋院宣旨は、天喜三年の物語歌合のために「玉藻に遊ぶ権大納言」を書いている。この作品の作中歌は、「風

葉和歌集」に一三首も選入されており、「無名草子」にもその名が見えることから、かなり高い評価を受けた長編の物語であると考えられている。六条齋院歌合に参加する女房は、いずれも和歌を能くする人々であるが、宣旨は、物語の創作にも、豊かな才能を持っていたのだろう。その宣旨が、なぜ

「狭衣物語」の受けとめる母体を宇治十帖を含む「源氏物語」全編に求めることは、つねに暗黙の了解なしは自明の大前提であつたようだ。無論、詞章や構想、人物造形上の素材というような微視的次元においては、このことはむしろ当然であり、そのいちいちを指摘してゆけば、「狭衣物語」の作者は、自作の原拠を、光源氏没後の世界からいくらかかりてきている。（注）という、物語——厳しい批評の言葉を借りるのならば、「源氏物語」の模倣亜流にとどまる作品——を作つたのである、うか。

「玉藻に遊ぶ権大納言」の執筆など、物語作家としての実績を持つ宣旨が、習作として「源氏物語」を真似た作品を作つたとは思えない。「源氏」以降の王朝物語が、その感化を受けないほうがおかしいのかもしれないが、それでも無意識にここまで大きな存在を占めるものだろうか。「狭衣物語」が偶然に「源氏物語」に似ているという可能性が

薄いとすれば、「狭衣」の作者は、意識的に「源氏」を取り込んだのと考えられる。では、なぜ宣言は、「狭衣物語」に「源氏物語」の世界を取り入れたのだろうか。そしてそれが、「源氏物語」でなければならなかった理由は、何なのだろう。

「狭衣物語」は、祿子内親王のために作られた物語である。故に、この作品には、内親王の愛された物語が反映されている、と考えてもいいのではないだろうか。内親王を慰めるという目的を持って創作された「狭衣物語」は、内親王が特に好まれた物語——「源氏物語」——の世界を引き継いでいなければならなかったのである。

同じ理由から、「狭衣物語」は、「さらでもありぬべき事ども」に満ちているのではないだろうか。庇護者を失い、無彩色の人生を生きていかななくてはならない病身の内親王が心楽しまれるよう、天人は天下り、普賢菩薩は姿を現すのである。心が踊るような神秘的な事件が展開するのである。「まことしからず」<sup>注10</sup>が物語の常だとするならば、宣言は、その最大の形を描こうとしたであろう。

さらに、和歌をこよなく愛された祿子内親王が喜ばれるよう、和歌や歌語的表現が豊かに鏤められた、優美な文章が綴られるのである。

## 五

かくして、

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ

(卷一上9)

で始まる、「源氏物語」の薫り高い優美な物語は語られるのである。宇治十帖の薫を思わせる、どこか憂愁に閉ざされた美しい男主人公と、夕顔や浮舟を連想させる可憐な、けれど身分の釣り合わない女君との哀れ深い悲恋物語。源氏物語的雰囲気をつんだんに取り入れ、あちこちに和歌を引き、天稚御子をも降臨させた物語。宣言は、当初の目的を達したといえよう。

しかし、このようにして、描かれていった「狭衣物語」の、最も注目すべき点は、祿子内親王が投影された、女主人公源氏宮が登場することである。

「狭衣物語」の男主人公、狭衣は、光源氏を強く意識して想定されている。

光り輝きたまふ御かたちをばさるものにて、御心ばへ、まことしき御才などは、唐土にや類あらむ、この世には、今も昔も類なくぞものしたまひける。手など書きたまふさまも、いにしへの名高かりける人々の跡は、

千歳経けれど、も変はらぬに、見あはせたまふに、人々、「なほ時にしたがふわざにや、今めかしうたをやかになまめかしうつくしきさまは、書きましたまへり」とぞさだめられたまふめる。

また、琴笛の音につけても雲居をひびかし、この世の外まで澄み上り、天地をも動かしたまひつべきを

(卷一・上17)

いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさま(略)

わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲ををひびかし、すべて言ひつづけば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。

(桐壺卷・一114)

この狭衣の心を捉えて離さぬ最愛の女性。そして、狭衣の想いを決して受け入れない気高い皇女。それが源氏宮である。つまり、主旨は、「この世のものとも思われぬ」ほど優れた、麗しい主人公として狭衣を設定し、その狭衣をして、

色々に重ねては着じ人知れず思ひそめてし夜半の狭衣

(卷一・上41)

と、永遠の愛を誓わせてしまふ女君として、源氏宮を位置

付けたのである。

主旨は、禊子内親王の境遇を、「別の意義を持つ」ものとして『狭衣物語』の中で語ってみせたのであろう。幼くして両親を失い、堀河大臣にひきとられ、やがて賀茂斎院となられる皇女。明らかに禊子内親王をオーバーラップさせた女君は、それ故にその生涯を賛美され、肯定されなければならぬ。物語の進展に何ら寄与するわけではないその生き様を皇女の生として、最善のものと描くために、他の女君達は、すべて不幸な人生を歩むのである。作者は、源氏宮の「何も起らない生涯」を最高位につけるため、相対的に他の女君たちの生き方を下げるより仕方がなかったのだろう。

同時に、狭衣もまた、叶うことない源氏宮への愛情を貫くという、迷宮のような人生を定められてしまふ。源氏宮(禊子内親王)のために作られた狭衣に、他の選択は許されない。故に、

はじめから予め定められた物をのみ思う人生を(前世の契り) Ⅱ 宿世として、かわることなく生きる(前世) 主人公として描かれるのである。

## 六

ここで、源氏宮と他の女君との係わりについて振り返ってみたい。

まず飛鳥井女君について見てみる。彼女は「狭衣物語」のなかで、

狭衣物語に描かれた女性について、殆ど個性らしいもの、表現なく多くが類型に墮し、一様に憂愁に閉ざされた人物を描く以上に出てゐない。(注は)

という点をただ一人逃れている女君である。何故ならば、この時点(飛鳥井物語)では、まだ物語は、「裸子内親王を慰め、楽しませる」以上の目的を持っていなかっただからである。ここでの源氏宮は、狭衣が、どれほど愛しても手の届かぬ永遠の女性、という、物語の設定上の規約に過ぎない。狭衣と飛鳥井との悲恋は、源氏宮の存在のためではなく、当然の結果であつたといえよう。それは、飛鳥井の身分の低さのためであり、彼女が夕顔や浮舟といった、はない女君のイメージを負っているせいでもある。

(イ)我が心にも、すぐれてこのことのためだしなど、わざと御心とまりぬべきゆゑもなけれど、ただそぞろに、見ではえあるまじういとほしく、心にかからぬひまな

く、我ながら物狂はしきまでおほゆるを、「これやげに宿世といふものならむ。かくのみおほえば、宿世口惜しくもあるべきかな」と、目に添へてえさり難う、浅からずのみおほえたまへば、(巻一・上68)

・あやしきまで、今朝のほど昼間の隔てもおほつかなくなど、思ひわずらはれたまへば、かつはいともの狂ほしく、さまで心とどむべき事のさまにもあらずと、いみじくも思ひさましたまふに、(夕顔巻・一226)

(ロ)わざと気高くまことしきよりは、なかなかさま変はりたるうちとけなどより始め、ものはかなげにらうらうじからぬもてなしなどの、あやしきまでらうたく、見ではえあるまじくおほせば、(巻一・上75)

・艶だち気色ばまむ人は、消えも入りぬべき住まひのさまなめりかし。されど、のどかに、つらきもうきもかたはらいたきことも、思ひ入れたるさまならで、わがもてなしありさまは、いとあてはかに見めかしくて、

(夕顔巻・一230)

以上のように、狭衣が思いもかけず、飛鳥井に心惹かれていく様などは、夕顔の場面を彷彿とさせずにはおかない。さらに、

(イ)我がゆくへをも海人の子とだに名のらねば、

(巻一・上70)

という場面で、『狭衣物語』が、

しらなみのよするなぎさによをすぐすあまのこなれ  
ばやどもさだめず (和漢朗詠集) 遊女七二二)

を引用するとともに、この和歌を含めた『源氏物語』の場面を引いていることにも注意したい。

・「海人の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさま、

(夕顔巻・一 236)

このことは、村川和子氏が、

単に古歌を引くのではなく、従来の物語の歌、特に本歌取りの歌や引き歌を引き、既に古歌と本文との二重の表現がなされているものを更に引くという技法は、

いわば、三重の表現であり、従来の物語の情趣やイメージを漂わせ、複雑巧妙で含蓄のある表現をなし、<sup>(注15)</sup>

ていると指摘されており、さらに、池田和臣氏は、

『源氏物語』の特定の場面や登場人物の生のありようまでもが文脈によびこまれてくるものから、引用というより、ある典型的な事柄、状況、心情などに対するいいまわしの『源氏』的類型化ととらえられるもので、『狭衣』には、気儘で無定見としか思われぬ、豊饒とも空虚ともつかぬ様々な位相の『源氏』引用がみちみちている。<sup>(注16)</sup>

と論述されている。夕顔のイメージを負った飛鳥井が、は

かなく世を去る運命にあったことは、明白である。さらに、飛鳥井女君には浮舟のイメージも重ねられている。

(二)かやうにおぼし捨てざらむほどに、雁の羽風にまよひ

なむこそ心にくからめ (巻一・上76)

・いとうたてある事は出で来なん。わが身ひとつの亡くなりなんのみこそ、めやすからめ

(浮舟巻・六176)

このように、『源氏物語』の場面を踏まえ、夕顔と浮舟を下敷きに作られた飛鳥井が、

①薄幸の女君であること。

②入水に追い込まれること。

という要素を持っていたのは、当然のことだったのでないだろうか。

次に、女二宮について考えたい。作者は、『源氏物語』の女三宮を念頭において、女二宮を作ったのだろうか。父帝にこよなく愛された皇女であり、罪の子を産んだ後、落飾する生涯を思えば、なるほど、女二宮は、女三宮を踏まえて創作されたのだといえよう。しかし、作者が女二宮に与えた役割は、女三宮のものとは、大きく異なるように思う。

それは、源氏宮との比較という存在である。源氏宮も女



二宮も、皇女という高貴な血を受け継ぎ、輝くような容姿と資質を併せ持った女君である。ところが、両者の生き方は、全く別々に分かれてしまう。一人は、この世のものとも思われぬ麗しい男君の求愛を退けて齋院に入り、もう一人は、その男君の子を産んで出家をするのである。女二宮は、ある意味で別の人生を選択した源氏宮であつたかもしれない。作者は、女二宮の選択を悲劇に仕立てあげること、源氏宮の見事な生き様を際立たせようとしたのであるうか。

宮たちは何となく過ぐしたまへるこそよけれ。軽々しき御有様に思ひよそへられたまはむこと、あるまじきこと  
(巻二・上145)

なほ、宮たちは、ただ心にくくてやみたまひなむのみこそ目やすかるべけれ。  
(巻四・下356)

以上は、物語の中で非常に重要な意味を持つ当時の通念である。前者は、女二宮の母皇太后の言葉であり、後者は、帝位に就いた狭衣の言葉である。皇太后宮は、最愛の娘が、その言葉通りの人生を生きられなかったことを嘆き悲しむあまり、とうとうはかなくなれるのである。そして、いわば、その原因を作った狭衣は、愛娘一品宮(飛鳥井姫)には、女二宮のような苦しみを味わせまいとする。

つまり、女二宮の生は、皇女として、否定されたものだ

だったのである。それは、結婚によって、不幸になった皇女という図式を背負った宮が、結婚をしなかったために、苦しむこともなかった源氏宮と正反対の位置にしていることを示している。このことは、

女二宮の運命が、源氏の宮の存在によって曇ぬられた反面、源氏の宮の将来は、女二宮の出現で左右されることはなかった。そこにメインプロットの女主人公とサブプロットの女性の立場上の相違もうかがわれる。源氏の宮という「永遠の女性」がいなければ、女二宮物語は決して存在しない。<sup>注15</sup>

という設定の中で作られた女二宮の運命であつたともいえる。

源氏宮(禊子内親王)の生涯の肯定と賛美という、目的を持った物語は、源氏宮の崇高な「皇女の生」をより輝かせるために、その比較の対象を求めたのである。

最後に式部卿宮の姫君について考察したいと思う。この姫君こそは、源氏宮に生き写しの容姿を持つ形式の女君である。

気配、肌つきなどのうつくしさは、世に類なきものに思ひしめきこえたまへる御有様に劣りたまふまじかりけり  
(巻四・下253)

うち見るはなほおどろかるれば、寄りて引き延べて、  
裾うちやりたるに、まことに、おくれたる筋なしとは  
これを言ふにや、と見えて、取る手もすべるつや、筋  
のうつくしさなどの、齋院の御髪にいとよく似たまへ  
り。  
(巻四・下282)

御かたちなどこそいとよき御あはひに見えさせたまへ。齋院にぞあやしきまで似たてまつらせたまへる

(巻四・下289)

作者は、狭衣に  
ただ、あながちなる心のうちをあはれと見たまひて、  
かかる形代を神の作り出でたまへるにや

(巻四・下255)

と語らせることでも、この女君の「身代わり」という役割を強調している。狭衣は、式部卿宮の姫君の美しさに、愛らしさに、永遠の憧憬、源氏宮を見るのである。

『源氏物語』の紫の上を連想させるこの女君の幸運は、それを凌いでいると言つてよいだろう。狭衣の登極に伴い女御として入内、ほどなく中宮に立后、そして何よりも、かの紫の上でさえ叶えらなかつた、若宮の母君という地位を手に入れるのである。しかし、ゆくゆくは、国母になられるであろうこの姫君の、あまりに希薄な印象は、どうしたことなのだろう。

これは、源氏宮に瓜二つの容姿を持ちながら、決して源氏宮になることはできない、形代の女君の悲劇であるといえよう。狭衣が不変の愛情を捧げるただ一人の女性——源氏宮——が存在する限り、姫君は、あくまでも「身代わり」ではない。狭衣が、「身代わり」ではない、真実の姫君に向かい合うことはないのである。これは、狭衣が女君を愛さなかつたという意味ではない。

かつ見る人の御有様の、めでたく、思ふさまに御覧ぜらるるにつけても、我が御宿世のめでたかりけるは、かたがたにつけつつ、なのめならずおぼし知らるるものから、御心のうちはさらにやすかるべくもなかりけり。  
(巻四・下343)

式部卿宮の姫君を素晴らしい、理想的な人物だとしながらも、源氏宮を想う宿命からは逃れることができないのである。

狭衣帝の寵愛を一身に受け、男御子の母君となり、中宮に上り、望むべくもない幸運のただ中にいながら、姫君は、決して幸福ではない。狭衣の、最も近い場所を許されながら、相手の心は、遠く寄り添えぬことを思い知らされる悲哀は、どのようなものであろうか。中宮となられて、唯一詠まれた和歌が、

立ち返り下は騒げどいにしへの野中の水は水草居に

けり

(巻四・下351)

であることを思う時、幸運の頂点を極めようとする形代の女君の、深く静かな孤独を感じずにはいられない。狭衣が源氏宮に誓った永遠の愛情は、いささかも揺るぐことなく守られたのである。

## 七

「狭衣物語」が、誰の視点で書かれたのか疑問であつた。主人公狭衣の、打ち破られることのない「物思いの宿世」<sup>(注5)</sup>は、何が原因なのか。そう考える時、浮かび上がるのが、源氏宮という存在である。ただ一人、狭衣の宿命に引き込まれることなく、気高い皇女の生を貫く女君。賀茂齋院として神垣に赴く女性。源氏宮の背後に見えてくるのは、六条齋院禊子内親王その人である。

禊子内親王を慰め、楽しませた「源氏物語」のような物語は、やがて内親王の生涯を肯定し、賛美するという目的を持つようになる。物語的な人物として描くには、あまりにも大きな制約を受ける源氏宮の生きざまを、「幸福な皇女の生」とするために、狭衣は、閉ざされた物思いの人生を歩むのである。叶えられることのない愛を源氏宮に誓うのである。

よって、「狭衣物語」は、狭衣の「物思いの宿世」を描いたものではない。世にも麗しい男主人公に、行き止まりの人生を歩ませてしまふ、源氏宮の物語なのである。そして、無為の生を余儀なくされた狭衣の宿命に巻き込まれた女君たちの悲運も、ここに定められたのだといえよう。

すべては、源氏宮(禊子内親王)のために。その輝かしい生涯を歌いあげるために。六条齋院宣旨は、禊子内親王をこよなく愛し、慈しんだ乳母のまなざしを通して、「狭衣物語」を作り上げたのではないだろうか。

## 注 記

1. 貞永二年三月二十日の条
2. 「無名草子」岩波文庫
3. 日本古典文学大系「栄花物語」下
4. 後宮などに関する歌合で、次に多いのは、祐子内親王(禊子の同母姉)主催の六回。
5. 角川「新編国歌大観」第一巻
6. 「後拾遺和歌集」の八七四歌の詞書にも「物語合」とあるが、正確には、「物語歌合」であろう。ここでは、詞書の表記に従った。
7. 永長元年九月十二・三日裏書

8. 7. に同じ
9. 後藤康文「もうひとりの薫——『狭衣物語』試論——」（『語文研究』六八号）
10. 【無名草子】
11. 物語本文は、日本古典集成『狭衣物語』上、下巻に拠る。アラビア数字は、頁数を示す。
12. 本文引用は、日本古典文学全集『源氏物語』一―六巻に拠る。アラビア数字は、頁数を示す。
13. 池田和臣「狭衣物語の修辭機構と表現主体」（『国語と国文学』六三卷三号）
14. 斉藤清衛「狭衣物語の表象」（『国語教育』第十三卷一号）  
日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅳ』有精堂
15. 村川和子「狭衣物語における引き歌の一考察」（『実践文学』四二号）
16. 池田和臣「引用・類型表現の根柢にあるもの——『狭衣』の『源氏』引用をとおして——」（『論集源氏物語とその前後』新典社）
17. 平野孝子「狭衣物語の構成」（『言語と文芸』五五号）  
日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅳ』有精堂
18. 13. に同じ

（平成四年度大学院博士前期課程修了）